

妖怪が実在する世界で
妖怪を否定するだけの
話

すねこすりすり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通り、ゲゲゲの鬼太郎ワールドで妖怪の存在を否定する話。

なお主人公はいろいろと心労に悩まされることになる模様。

加えて鬼太郎ワールドはアニメ六期世界線とする。

妖怪主題で妖怪を否定することはある意味アンチ・ヘイトと捉えられるかもしれない、しかしそういった意図は一切ないので注意して欲しい

「けいべつ?世の中を知らない少年のことばだ」

目次

1・怪しい宗教にはご注意を	1
2・仏門に入った者達	5
3・ゲゲゲの森	9

1・怪しい宗教にはご注意を

「妖怪つてのを学問的には民俗学に分類される。実際にはそんなモノはこの世に存在せず、彼らは人類の歴史や文化の中で人類の意識の中にのみ生み出された架空のモノだ。もし妖怪が現実存在することを肯定したならば、それは人類の否定に他ならない。だから妖怪なんてモノは決して存在しないし、存在してはいけないんだよ」

妖怪は本当にいると思うか、というクラスメイトからのよくある質問に対して俺はいないとはっきりと断言する。そりゃあそんな不思議な存在が実際にいればきつとワクワクしてしまうことは否定できないが、彼らは決して現実には存在してはいけない。「でもそれってなんだか寂しくない?」

「寂しい?」

「うん、目に見えるものだけを信じて、見えないものを忘れちゃうような気がする」
成程、曖昧だけと言いたいことはなんとなく理解出来た、けど彼女どうにも誤解している。

「それは違うよ、存在しないからこそ、見えないからこそ、妖怪は妖怪として形を保っていられるんだよ。見えてしまえばそれは妖怪でもなんでもなくて珍しい動物に成り

下がるんだよ。そして珍しいだけのための動物なんていつかは絶滅して忘れられて記録だけの存在になる。けど妖怪は違う、彼らはいっだって人間の中から生まれて人間の中で常に存在しているんだ」

「でもそれだつていつかは忘れちゃうんじゃないの？」

「確かに今の形のまま人間の中にある限りは変わらないだろうけど、人間が人間である限り、意思と感情と文明を持っている限りは形は変わっても彼らを忘れることは決してありえないよ」

「成程ね、そんな考え方もあるのね。ありがとう参考になったよ」

「こんな嫌味みたいな話でも役に立つならよかったよ」

「嫌味だなんて、全然そんなことないよ！」

「そりゃあどうも、ところで急に妖怪の話なんてどうしたの？ 民俗学とか文化人類額とかに興味を持ったなら関連する本とか貸してあげるよ？」

「どうにも妖怪が好きだなんて言っていると、オカルト好きに間違われやすい上に、ちゃんと説明してもあまり興味を持つ人は少ないから、同好の士が増えるのは大歓迎だ。」

「あ、えつと興味ないわけじゃないけど、そういうのじゃなくてちよつといろいろあつてね」

「なんだ、言いにくいことか？ あれか、もし悪質な宗教の勧誘とかならはずきりと断るべきだぞ。目に見えないけれど神様は確かにいるんですとか、あなたには悪い妖怪が取り付いています今ならこのなんちやらが格安で解決して差し上げます、なんて言う怪しい奴らに付きまとわれてるんだろ」

「ち、違うよ……、というかやけに現実的だね……」

そりゃあ実体験だしな。

「まあ、違うならいいや」

しかし本格的に興味があるわけでもなくて、ヤバイ宗教勧誘でもないなら一体なんだろうか、気になるところはあるがそこまで親しいわけではない彼女にあまり深く聞くのも失礼か。

「大丈夫だよ、そんな危ないことじゃあ……いやちよつとは危ない事だけどそういうのじゃないから。最近ちよつと妖怪の知り合いが出来ただけだから！」

「は？」

妖怪の知り合いってなんだよ、それ本当にヤバイ宗教の信者とかじゃあないのか？

もしかして彼女は既にその宗教の信者で今までの会話も全部俺を引き込むためのセールストークだったのか？

「あ、授業始まるから席に戻らないと！ ありがとね！」

とまあ俺の頭の中の疑問符を解消することもなく、無情にも授業開始のチャイムに彼女との会話は遮られてしまった。

「……………犬山さんが変な宗教に嵌っていいことを祈ろう」

この後、彼女に度々妖怪について聞かれ、その度に怪しい壺のセールスとかお布施の依頼とかをされるのではないかと戦々恐々とする事になるとは今の俺には知る由もなかった。

2・仏門に入った者達

「見上げ入道？」

最近なにかと話すようになったクラスメイトの犬山さんの質問を一度聞き返した。

「そうそう見上げ入道ってどんな妖怪か知ってる？」

「そりやあまあ、全国的に有名な妖怪だしね」

見上げ入道、または見越し入道、全国的に資料が残っている妖怪だ。

「じゃあじゃあ！ 見上げ入道の弱点とかも知ってる？」

「弱点っていうと、やっぱり一番有名なのは見上げ入道見越したかな」

「凄いな！ 私そんなこと全然知らなかったよ」

そんなたいそれたことではない気がする。そういった話が好きな人なら誰だつて知ってるような基本的な事だ。

「それに正体は所謂化け狐だとか化け狸だとか、下から上へ見上げていくと際限なくデカくなっていくけど逆に上から下へ見下げていけば小さくなって消えるだとかいろいろあるね」

「へえー！ あーもう先にその事を聞いてればなあ」

「聞いてれば?」

「うん、そうすればすぐに見上げ入道を退治出来たのに」

退治って本当に見上げ入道に会ったみたいな言い草だけど、当然そんなことはないだろう。ただ怪しい宗教団体の信者疑惑のある彼女の言葉を単純に否定してしまえば、逆上して何をされるか分かったもんじやない。ということと適当に合わせるのでしょうか。

「そうはいつでも日本全国に分布している妖怪だから、単純に全ての弱点を持つているってわけでもないんじゃないかな。地域毎にそれぞれの弱点を持った見上げ入道がいるんじゃないかな」

「地域毎って、あんなのが他にもたくさんいるってこと!?!」

「まあ妖怪ってそういうものだからね、それに加えて言えば入道に分類される妖怪はたくさん種類がいるから見上げ入道と別の入道が同一視されることもあるよ」

「同一視?」

「そう、つまり二つの異なる妖怪が同じモノだと見なされること。もともと一つだったモノが二つに分かれて同じモノ扱いされたり、二つだったモノが一つとして扱われることもあるよ」

「それって、くつついたり離れたりするってこと?」

「そんな簡単な話じゃあないけど、まあそんな認識でも別に困ることはないよ」

「へえ、それじゃあ他に入道ってどんなのいるの？」

「そうだね、坊主も入道に含めたらそれこそたくさんいるよ。見上げ入道から青入道、蟹坊主に珍しいとこだと岩魚坊主、それに加牟波理入道なんてのもいるし、山伏の恰好をしている天狗も広義的に入道になるかもね」

そもそも入道とは要するに出家して坊主になることを指す。つまり坊さんの恰好してる妖怪は総じて入道系に分類してもいいだろう。

「天狗って名前は知ってるけど入道だったの!？」

「あくまで広義的にはね。詳しく説明すると宗教の小難しい話になってくるんだけど、一説では天狗と仏教には繋がりがあがあるなんて言われてるからね。もっとも源流を辿っていけばどちらかというと神道よりだと俺は考えているけど」

「妖怪について知るには宗教についても知らないといけないのかなあ」

「そりゃあ勿論だ、妖怪と宗教は切っても切り離せない関係にあるんだから。日本民俗学の礎を築いたある学者は『妖怪とは神が零落したものだ』なんて述べてるからね。妖怪を知るには神を知る必要がある、神を知るとして事は信仰、宗教を知ることと同義だと思っうね」

「難しそうだなあ」

「気になるならいつでも教えてあげるよ」

犬山さんが怪しい宗教団体の信者かどうかはともかく、好きな事を真面目に聞いてくれるってのは存外うれしいものだからね。

「ほんと!?　じゃあじゃあ連絡先教えてよ!」

「はいよ」

とは言ったものの、友達も少ない身の上では有名なSNSアプリケーションの使い方をいまいち知らないので、彼女にスマホごと渡して操作してもらう。

「ありがとう、ほいほいっと」

彼女がササッと操作するとあっという間に彼女の名前が友達欄に追加されていた。

「はい出来上がり、じゃあ何かあったらまた聞かせてね」

そこでいつものようにチャイムの音が鳴ったので彼女は自分の席に戻っていった。

数少ない友達枠が増えて嬉しいが、この先かなり頻繁に彼女から妖怪対策を聞かれることになるはこの時の俺には知る由も無かった。

3・ゲゲゲの森

「ハハハ？」

「うん、その茂みに入っていったままいなくなっちゃったの！」

休日だというのに特に予定もなく家でゴロゴロしていたところに犬山さんからメッセージが届いた。なんでも知り合いが神隠しにあつてゲゲゲの森とやらに行つてしまつたらしい。よく分からないけど、どうにもいなくなつた知り合いを探すを手伝つて欲しいそうだ。

「それにしてゲゲゲの森だっけ？」

「うん！ 鬼太郎達がいるところ！」

ゲゲゲの森に鬼太郎、どちらも聞いたことがない。鬼太郎というのは妖怪に關しての困りごとがあつた時に妖怪ポストに手紙を入れると助けに来てくれる妖怪だそう。そしてゲゲゲの森はその鬼太郎が住んでいるところらしいけど、これは妖怪譚というよりも都市伝説に近い話な気がするな。

「生憎だけど、その鬼太郎とかいう都市伝説は詳しくないんだ」

「鬼太郎は都市伝説とかいうのじゃなくて妖怪だよ！」

「ああうん、まあどつちでもいいんだけどさ。とにかく知らないものは知らないから探すとしても普通に手分けして探すしかないよ」

幸いにもその知り合いの子がいなくなったのは神社の裏手にある小さな林だし、たぶんどつかで転ぶかなんかして身動きが取れなくなってるだけだろう。ゲゲゲの森なんてのが実在するならともかく、そんなものは存在しないのだから。

「とにかくその茂みの奥の方を見てみようか」

「でも、普通の人間はゲゲゲの森には入れないんだよ?」

「まだそのゲゲゲの森に行ってしまったって決まったわけじゃないでしょ?」
そう言いながら茂みを分け入って奥へと進んでいく。

「あ、待ってよ!」

「怪我しちゃうかもしれないから一人で待つてくるよ、犬山さんはとりあえずそこで待つててよ」

実際の所、木々が擦れて痛い。気を付けていないと怪我をしそうだ。そんな茂みを進んでいくと少し開けた木の根元に小学生くらいの子供が倒れているのを発見した。

「あつさり見つかったな」

少年に近づいて軽く肩を叩くと、少年は目を開けた。

「あれ……(´・`・´)は……?」

「やあ、お目覚めかな少年」

「あ、えつと誰ですか？」

「俺は犬山さんの……友達かな？ 君が裕太君で間違いないかな？」

「はい」

「そうか、犬山さんが向こうで心配してるから早くいこう」

「まな姉ちゃんか？」

「そうだよ、立てる？」

「はい、大丈夫です」

見つけた少年は探し人で間違いなかった。元気に立ち上がることも出来るように心配はなさそうだ。

「その茂みは危ないから、そっちから迂回していこう」

少し遠回りになるが無事も確認できたことだし慌てて戻る必要もない。

「ところで裕太君、どうしてあんなところで寝てたんだい？ 転んで頭でも打つてない？」

もしかしたら頭を強く打っているかもしれない、そうなると今は元氣に見えても後からなにかしらの症状が出てくるかもしれない。もしそうだったら念のため病院で検査して貰ったほうがいい。

「えっと、僕ゲゲゲの森に行ってたんです。そこでいろいろあったんですけど、気が付いたらあそこに帰ってきていたんです」

また、ゲゲゲの森か。最近の小学生の間ではひと昔前みたいに都市伝説が流行っているのかもしれないな。

「そうかい、本当だね？　実は頭を打ったけど危ないこととして怒られたくないから嘘を付いていたりしない？」

「本当ですよ！　僕は本当にゲゲゲの森に行っていたんです！」

「いや、別にそのことを疑っているわけじゃなくてね、頭を打っていたら後から怪我が見つかるかもしれないから念のためね。それよりゲゲゲの森っていうのはどんなところなんだい？」

「あ、しまった！　本当はゲゲゲの森の事を人に話しちゃいけないだった！」

「なら今回は聞かなかったことにしておくよ」

俺の知らない都市伝説について詳しく知りたいところだけど、無理に聞き出すのも悪いだろう。そんなふうに話している内に犬山さんの姿が見えた。

「あ、まな姉ちゃん！」

「裕太君！」

無事合流出来てなによりだ。

「怪我もないみたいだから安心していいよ。それじゃあ用事も終わったし俺はこれで」

犬山さんと裕太君の再開を後目に家に帰る。今回は俺の知らない都市伝説の噂が聞けたからその事について調べる必要がある。最近は何も目立った都市伝説の噂を聞かなかつたから実に楽しみだ。